

茶の湯をめぐる国際交流史

熊倉 功夫

1、茶の湯を見る海外の目―近世から近代へ―

欧米人による茶の湯への注目は、大航海時代にはじまる。日本を訪れたヨーロッパの人々は、日本を象徴するユニークな文化として、すでに茶の湯に注目していた。

キリシタンの通辞ロドリゲスは、16世紀の日本文化誌ともいべき大著『日本教会史』を著したが、そのなかで3章にも及ぶ詳しい茶の湯論を展開している。ロドリゲスの茶の湯の理解は実に深い。たとえば、堺の町衆（千利休もその一人であるが）の間にひろがったchanoyu（ロドリゲスは、「スキ」という言葉と両方で表現している）について、こんな風に記している。

この都市にあるこれらの狭い小家（茶室のこと―引用者）では、たがいに茶chaに招待し合い、そうすることによって、この都市がその周辺に欠いていた爽やかな隠退の場所の補いをしていた。むしろ、ある点では、彼らのこの様式が純粋な隠退よりもまさると考えていた。というのは都市そのものの中に隠退所を見出して、楽しんでいたからであって、そのことは彼らの言葉で市中の山居xichu no sankioといっていた。それは街辻の中に見出された隠退の閑居という意味である。

「市中の山居」という美しい言葉は、ロドリゲスのおかげで今知ることができるのだが、茶の湯が単なる礼法でも儀式でもなく、人々が日常の雑事を離れて、一時の遁世の時間をもつ精神の解放空間であったことを、ものの見事に言い当てている。

ロドリゲスが『日本教会史』を書いたのは、千利休たちによって茶の湯の様式がほぼ完成された時期であった。ちょうど中央集権的な国家が織田信長、豊臣秀吉さらに徳川家康によって建設される時代である。なぜロドリゲスがこれほど詳しく茶の湯について記したのかといえば、いうまでもなくキリシタン布教活動の実践の上で、茶の湯は、その政治的、社会的機能の点でまずヨーロッパ人に注目されたからである。しかし、さきにも述べたようにロドリゲスの理解は、こうした戦略的な枠組みとは別に、より深い愛着をその背景にもっていたと思える。

やがて江戸時代を通じて、芸道としての茶の湯は形式性を強め、点前作法や道具の扱いについて煩瑣なまでに細部を整備した。その結果、茶の湯は茶道とよばれることも多くなった。ロドリゲスの時代から250年を距てて、幕末に日本へきた西欧の人びとの目に映ったのは、まるで、宗教の儀式のような茶の湯であったにちがいない。彼らは、茶の湯をTea ceremonyと翻訳した。

いつごろからティー・セレモニーが用いられはじめたのか、まだつきとめられないでいるが、たとえば明治10年に来日したエドワード・モースはこの言葉を使っている。もっともその使用例は1886年（明治19）に出版された『日本のすまい・内と外』のなかで、The tea-ceremonyとハイフンでつないで一語として用いる。モースは、実は茶の湯のよき理解者であった。明治10年代といえば茶の湯の人氣が地に落ちた時期である。「目今形勢興廢競」という流行不流行の番付に、不流行の閑脇にあげられているのが茶の湯。そうした世間の風潮のなかで、モースが茶の湯に好意がもてたのは不思議なことであった。

モースはこんな風にのべている。

茶の湯のことを何も知らずに、茶をたてるのをみると、まったくふしぎな行為のようにおもえてくる。茶の湯の作法は、無駄で、馬鹿げたことだらけにおもえるが、わたしが練習をかさねてみて、多少の例外はあるものの、その動作は自然で、簡単なものということがわかった。だから茶会につどう客も、一見、緊張し

ているようにみえても、じつは、いつもまったくくつろいでいるのである。『日本のすまい・内と外』

なぜモースが茶にたいして暖かいまなざしがもてたのか。一つには、実際に茶の湯を学び、茶会に出席する経験があったのと、そのよき指導者蜷川式胤がいたことがあげられる。第二の理由は、モースの愛する日本陶磁の発達は茶の湯なしには考えられなかったからである。モースは理論から本質にたつする道筋のほかに、物と実践を通じて本質を把握する道筋を心得ていたから茶の湯のセレモニー的な側面にこだわらなかった。

同様に茶の湯に深い理解を示した外国人にポルトガルの外交官モラエスがいる。モラエスは明治22年に来日した。彼は「茶の湯」（『大日本』花野富蔵訳1898年原著刊行）のなかで次のように述べている。

「茶の湯」は定義できるとすれば、その素晴らしい日本人だけに資格があるので、それは行き届いた清潔さで抹茶をたてる術であり、その飲み物をいくたりかの同好の士というよりも、思いをこらして五感をしずめるためにしつらえた場所の茶室に集まった友達に配るものだ。

しかし明治時代に日本を訪れた外国人が皆モースやモラエスのように好意的に茶の湯を見たわけではない。

モースとほぼ同時代に、ティー・セレモニーを事典風に解説したチェンバレンには、こうした茶の湯の本質を発見しようという視覚が欠けていた。だから茶の湯のセレモニー的な面に目がとらわれている。チェンバレンの『日本事物誌』は書物としては面白いが、茶については、一応の解説ののち、「ヨーロッパ人にとって、茶式は長つたらしく無意味である。一度ならず見学してみると、それは我慢できないほど単調である」といったぐあいに延々と悪口が続いている。

幕末以来、だいたい茶の湯はティー・セレモニーと訳されることが多かったが、茶の湯という言葉も使われなかったわけではない。外国語で書かれた最初の茶の湯の教科書は、1911年にストックホルムで出版されたイーダ・トロチックの"Cha-no-yu, Japanernas Teceremoni"で、スウェーデン語で執筆された。ここではチャノユとティー・セレモニーが併記されている。しかし、その理解はチェンバレンと違って、茶の湯のセレモニー的な点前や作法について、その重要性を説き、決して無意味とは考えていなかった。

2、点と点の交流

茶の湯の点前作法について、つまり茶の湯の実技について最初に外国語で説明し、これを出版したイーダ・トロチックは、単なる茶の湯の紹介者にとどまることなく、茶の湯の国際交流の上で重要な役割を果たした。彼女によって、日本から茶室瑞暉亭がストックホルムに贈られるという快挙がなしとげられたからである。その経緯を少し詳しく述べてみよう。

イーダ・トロチック(Ids Trotzig)は神戸に来住したスウェーデン貿易商夫人で、日本に30年余の長期に渡って住み、その間に茶道といけばなを学んだ。トロチックはスウェーデンの茶商ダグラス・ルンドグレンの会社に勤務し、その援助のもとに、茶室の建築を計画した。1933年1月29日付のトロチックからパリのギメ博物館にいたエリセーエフ教授（のちにハーバード大学教授。ライシャワー博士ら日本学者を育てた）宛の手紙によると、1931年11月にストックホルムでひらかれた日本展にエリセーエフ教授がパリから来て、数度にわたるトロチックとの会談がもたれ、その結果、エリセーエフの示唆するところに従って翌年、スウェーデンから日本に正式に茶室寄贈の依頼がなされたことがわかる。

最初の依頼状は1932年6月1日付で、スウェーデン、ストックホルムの王立民族学博物館（Royal Ethnographical Museum）館長リンドブロム教授より国際連盟日本学術協力委員会宛に発送された。この手紙によれば、次のとおり。

博物館では敷地内に茶室を建てたいと考えている。日本からスウェーデンまで運ぶ費用については館の後援者が支弁するという約束をえているので、適当な茶室を寄贈していただければ幸いである。茶室には室内の設備が必要だとのことで4・1/2タタミ（マット）、ファイアープレイス（ロ）、パントリー（ミズヤ）、

ハッチ・ドアー（ニジリマド）、いくつかのストーン・ランターン、ウェイティング・パビリオン（コシカケ）、その他、竹の垣根、門などがそろっているのが望ましい。当地は寒いので、加賀とか越後の地方から選んでほしい。

この依頼状には駐スウェーデン代理公使加藤三郎の紹介状がつき、これには、

・・・就ては当国最大の博物館が著名専門家たるリンドブロム教授指導の下に、前述の如き計画を実現し得るに於ては、本邦文化の紹介上至極結構の儀と思考せられ候間、其目的達成方、可然御人力相煩度、甚だ御手数ながら折入て御依頼申上候。

とあった。

依頼に対する日本側の態度は非常に好意的であった。同年8月9日付で、学術協力委員会事務長（赤松）よりリンドブロム宛に返事が認められ、日本スウェーデン協会の副会長藤原銀次郎より茶室を送るとの約束がなされたことを報じ、藤原銀次郎によれば、茶室を建てるために経験豊かな大工が必要で、その往復の船賃をスウェーデン側で負担してほしい、とある。リンドブロム館長からの手紙は、同年9月19日に草されている。リンドブロムは赤松事務長に、日本側の親切を謝し、ことに茶室の費用を藤原銀次郎が負担してくれることになったことを喜び、別便で藤原宛に手紙を書いたことも記している。さらに、後援者であるダグラス・ルンドグレンが、大工の費用を出す約束をしたと報じた。館長はルンドグレンについて、スウェーデン最大の茶輸入商で、日本に非常な興味をもち、日本訪問を願っていることを言い添えている。

北欧のスウェーデンと極東の日本との文化交流は、茶道を愛するたった一人の女性の熱意によって急速に深められた。それは一つに日本側からその要請にこたえる、やはり茶を愛する一事業家、藤原銀次郎が登場したことによる。藤原暁雲として著名な近代数寄者（政界、財界の有力者で趣味として茶の湯を楽しむ人）の一人である藤原銀次郎は、明治2年信州に生まれ、のち慶応義塾を卒業し、新聞記者を経て、三井銀行員となり、頭角をあらわし、王子製紙を引き受けて、製紙王をもってよばれるにいたった実業家である。その一方で、三井銀行時代から茶道に興味をもち、ことに根津青山らが茶道具を蒐集するに従って、道具の値のあがるのを見て茶道具も投資の一助と積極的な道具の蒐集に務めたことでも知られる。藤原銀次郎は製紙材料のパルプ輸入という関係からスウェーデン協会の副会長を引き受けていたのであろうが、そこへさきの依頼がきて、自ら数寄者としての社会的責任を文化交流の場で果たすべく、茶室の寄贈に熱心に参加した。

藤原銀次郎の考えでは、スウェーデンからの依頼にもあったように、しかるべき由緒のある茶室を北陸地方で探し、これを解体して輸送する計画であった。しかし、その後、スウェーデンに送られる藤原の手紙には、適当な茶室を探しえぬ悩みがのべられ、「・・・もし、博物館のなかの一室を茶の湯の部屋というように計画が変更できるなら、よほど問題は簡単で楽になるのだが・・・」と記した（1933年10月23日付、リンドブロム宛）。しかし博物館が最初に依頼してきた条件は四畳半であったのだから、自分には喜んで約束を果たすつもりはあるとはいえ、実際に屋外へ庭とともに独立した茶室を建てることになれば、小間一つの家をたてるわけにはゆかず、十畳か十二畳の広間がそれにつけ加えられねばならぬ。また、北陸地方の茶室がよいとはいえ、はたしてスウェーデンで、それが一年中気持ちよい建物として通用するかどうか気にかけている、とのべている。最終的に、いつ、既成の茶室探しを止めて新茶室建築に計画を変更したのか明らかなでないが、1934年7月16日付の藤原銀次郎の手紙では、ついに新しい茶室のプランを同封して、スウェーデン側に計画を示している。

大工の選定には困った。しかも二人のうち一人は庭師で大工の手伝いになる者を、というのが藤原の考えであった。そして彼らの費用はスウェーデン側の分担であったから、細かい注意を加え、日本に帰るまで、日当を一人7円払うように求め、茶室の建築には約2ヶ月かかるだろう、という。大工たちはスウェーデン語はもちろん、日本語以外一語も解さないから通訳の心配もしている。このあたりの気配りは、藤原銀次郎の人となりをしるのばせて、誠に心暖まるものがある。

1935年（昭和10年）元旦を期して茶室は起工され、茶室は3月19日に完成、瑞暉亭と名付けられ、同20日、慶應

義塾大学の西側の空地に仮建築された瑞暉亭に、秩父宮夫妻が招かれ、席開きが行われた。床には春屋宗園の紫野山門偈、古伊賀の花入には白玉椿がいけられ、古瀬戸肩衝賀茂、三島の茶碗、茶杓遠州作若草、という飾りであった。

数日の展覧が終わると、23日より梱包にかかり、横浜で山東丸に積み込み、また大工浮ヶ谷徳三郎、助手谷口国男の2名と一緒に乗船して、4月9日に出帆した。最初の依頼状がスウェーデンより発せられて以来、約3年の歳月がすぎていた。

約140日間の航海ののち、8月28日、瑞暉亭の材料はスウェーデンに到着した。9月1日、敷地が決定されるや、ただちに建築にかかる。日本語しか解さぬ大工と、スウェーデン人の屋根葺や左官との間には、さまざまの挿話が伝えられるが、いまはそれは省略しよう。約1ヶ月余の順調な仕事によって、ついに10月8日落成式が挙行された。

スウェーデン皇太子夫妻が白鳥公使によって茶室に案内され、まずリンドブロム館長の挨拶、ここで、寄贈者である藤原銀次郎および、ダグラス・ルンドグレンに対する謝意がのべられ、さらに発企者であるイーダ・トロチックに謝辞があった。さらに日本から茶室とともにスウェーデンに渡り、見事な落成まで献身的な努力を重ねた浮ヶ谷徳三郎・谷口国男の二人が紹介された。つづいて茶室に移り、トロチックによって詳細な説明がおこなわれた。

瑞暉亭をめぐる国際交流をふりかえると、スウェーデンのイーダ・トロチックというすぐれた茶の湯の理解者と、藤原銀次郎というこれまたすぐれた、しかも財力のある茶の湯の理解者という点と点の間で結ばれた交流であったことがわかる。もちろん、その周囲には多数の人びとの協力があつたけれど、二人の個性が大きな要因であったことは間違いない。

これに先だって、1928年には、フィラデルフィア美術館の学芸員が日本に茶室の購入にきている。このときは仰木魯堂の作になる寸暇楽庵が譲られ、今日もフィラデルフィア美術館の館内に大切に保存されているが、この場合も、個性的な数寄者の努力とフィラデルフィアのキンバル館長、学芸員のフォレス・ジェインの熱意によるところが大きい。戦前の茶の湯の国際交流は個人と個人の点と点の交流を基本としていたといえるだろう。

3、面と面の交流

第二次世界大戦後の茶の湯をめぐる国際交流は、裏千家十五世家元鵬雲斎千宗室（現千玄室）氏によるところが大きい。

若き日の鵬雲斎がアメリカに茶道使節として渡ったのは1951年1月14日であった。その前年にも状況視察に渡米したが、今回は各地支部作りも含めた正式の使節ということであった。渡米の抱負を次のように語っている。

我が国が文化国家として再建途上にある今日、我々が祖先より継承したものゝなかで、尤も誇り得べき伝統文化の代表である茶道こそ、その優れた総合文化体系を広く国際間に認識して貰わねばなりません。（略）

終戦後、各界の伝統文化として茶華道界の中からは、未だ機運が生まれなかったためか、誰一人渡航していませんが、この方面からの海外進出は各方面より1日も早く時機の到来を念願されていました。しかしついに待望の日が訪れました。（中略）只今の予定では滞在6ヶ月、その間にハワイ、米本土各地を廻りまして、古くよりの在米同胞各位との親睦在米当流関係者との交流によって、茶道を説明しつゝ相互の文化を研究し、理解し合つてゆき度いと願っています。素より未だ修行中の私としましては、其の責任の重大な事を痛感して居ります。まして伝統文化界の者として、どの様な苦難にも打克ち必ずや所期の目的を達成すべく努力致します。（略）（『茶道月報』同1月号）。

同年11月23日、無事、羽田空港に帰国する間の在米中の記録を、毎月雑誌に寄稿しており、その記事によれば、各地での茶道人の熱心な歓迎と茶道教授がみられる。ハワイでは現地有力者の協力をえて、初の海外支部が発足し、「今百人程に教授していますが、多人数なので骨が折れます」（同3月号）と嬉しい悲鳴をあげることもあったようだ。3月4日の発会式では約250名の来会者があり、つづいて訪問したアメリカ本土では、たとえば、ニューヨークのコロンビア大学では300人からのアメリカ人が集まり、大きな反響のあったことが伝えられている（同7月号）。こうした米国通信のなかでまた興味を引かれるのは、英語圏における教授法についてのべられている点である。

宗教は真宗殊に西本願寺派が盛んで、リッパなチャーチがあり、英語と日本語で説教を行う、ウエスタン・スタイルの伝道方法をとっています。茶道の教授も海外ではこうしたウエスタン・スタイルを取り入れるべきで、其土地の環境、風土、気候にあう様に教授しなければなりません（同3月号）。

以来、鵬雲斎の活動としては年譜（『海外の茶道』『茶道芸術大系』第10巻）によれば2000年末までに150回をこえる海外出張を数えることができる。今日のアメリカで、知識人が茶道に対して一定のイメージを抱きうるにいたった背景のなかで、本来国家でなすべき文化交流を、一私人として遂行してきた鵬雲斎とその基盤である裏千家の存在は重い。

こうした海外の茶の湯教授の状況について、私は1977年にアメリカ西海岸で4人の教授者にインタビューを試みた。その回答の一例を次に示そう。まず質問としては

- (a) 茶道教授をいつはじめたか。はじめたころの状況。
- (b) 社中の状況。
- (c) 稽古のやり方。
- (d) 茶道具類および材料について。
- (e) 学ぶ人の興味、教えるポイント。

の5点を中心とした。質問について、教授者の一人は次のように答えた。

- (a) アメリカで生まれ、戦前日本に帰ったときに家元で茶の修行に入った。戦後帰米、昭和25年～6年頃より教授をはじめ、裏千家ロスアンゼルス支部の創立に参加した。戦前にL・Aでは江馬先生という人が流儀に関係ないお茶を教えていた。多分、女学校で教えられたままに、人に乞われると教えたものであろう。
- (b) 支部設立以来、茶名の取りつぎは65名、かなり弟子の数もふえている。社中は日系の一世・二世・三世が中心で白人は出入りが多いが長く続ける人が少ない。しかし5～6人はしっかりしている人がいる。家元の大きな援助によって、昨年には23名の社中で日本へ行くほどに成長していった。
- (c) 庭を直して露地を作り、つくばいをすえた。一室を改造して八畳の茶室とし稽古をしている。その他、出張稽古、学校の稽古などがある。稽古は和服、日本語でおこなう。三世の場合は英語になる。
- (d) 道具はすべて日本からとり寄せる。陶器類でアメリカ製のもの、手作りのものを利用する。炉は電熱で稽古する。ただし、茶道具もアメリカで買えるようになり、茶筌は10ドルで買える。先日茶筌供養をおこなった。
- (e) 茶道を学ぼうとする人々は日本的なものにふれたい、という興味でくる。従って点前だけではなく、歴史的なものに強い興味をもち、学という面が大切だ。点前についても、一つ一つ理由を求め、理論的でないと納得しない。白人の場合、経済的な面で、月謝以外の費用が理解されにくいときがある。

全体の印象としては、西海岸の場合、日系人社会の紐帯として茶道が独自の機能を果たしており、白人には入りにくいようだ。また裏千家の場合、やはり家元の影響力の圧倒的な強さを感じる。

では東海岸の場合を裏千家ニューヨーク出張所について考えてみよう。裏千家ではニューヨークに全米カナダ等を含む広大な地域の中心として家元出張所を1967年10月に開設した。同年12月6日付の「ニューヨーク・タイムス」は鵬雲斎を大きくとりあげ、ディスコの喧噪に酔う若者に対して、ここには静寂のなかに茶を学ぶ人々がいると記しているが、鵬雲斎の志向するところも、精神にあったといつてよいだろう。

ニューヨーク出張所では、出張所でおこなったアンケート結果について示教をうけることがあった。さきの「ニューヨーク・タイムス」の記事によると、当時の社中は日本人40名、アメリカ人30名ということであったが、現在はアメリカ人の方が多くなっており、ニューヨークの特徴としては日系人がまったくないことである。アンケートの解答例は23例でその大部分がアメリカ人である。

質問は

- (1) どうして茶道に興味をもつようになったのか。
- (2) この教室（出張所の教室）をどうして知ったか。
- (3) 茶道のなかで、どこが一番楽しめるか。
- (4) 茶道以外でアジアのことを学んでいるか。
- (5) 教室以外で、生活とか他の面で活かそうと思うか。どんなふうに。
- (6) 職業。

(1) に対しては、質問の意味が二様にとられていて、茶道へ近づいた契機という意味で答えている人と、動機という意味にとっている人がいる。前者の場合、解答した23名のうち7名が、前ニューヨーク裏千家会長ウィリアム・ジョンストン夫妻との出逢いをあげており注目される。ことに、夫人のミリー・ジョンストンの果たした役割が大きかったことがうかがわれる。その他、禅堂での茶の体験、禅の書物をあげている。後者としては、日本への興味をあげているが、日本美術・やきものへの興味をあげた人が各1人、点前への興味が3名で、禅から入った7名に比べると少ない。(2) に対しては「ニューヨーク・タイムス」で見て知った人が多く、その他は、やはり、ジョンストン夫人から教えられている人が目立つ。(3) については精神的な落ちつき（悟り、平安、座禅、めいそう、やさしさ）をあげる人がほとんどで、わずか動作とか美をあげる人がいる。(4) ではやはり禅が多いが、空手やいけばなもあげられている。(5) は解答も多岐にわたる。聖餐式のなかでの作法に活かそうという聖職者、コミュニティーのために、人間に対する態度として、というタクシードライバー、自己を高めるためという芸術を学ぶ学生、人間の理解のため（技師）、将来、患者に茶をやらせたいという精神病理医、毎日を美とともに過ごすというアーティスト、家族、友達と茶を楽しもうとする大学教師、その他さまざまな希望が出されている。

総じていえることは、禅と深く結びつき、禅をあげなくとも、精神的な平安を求める人々が、その大半をしめ、美の世界から茶に入ろうとする人が比較的少ない。西海岸のような日系人的な地域の紐帯にしようというような意識がまったくないのは当然としても、それぞれが個の世界を求めているところは、いかにもニューヨークらしい印象である。

近年「茶の湯文化学会」会報37号（2003年5月刊行）に、マリコ・ラフレール氏が「アメリカ茶の湯会議の報告」を発表している。氏は裏千家学園で茶を学び、フィラデルフィアで、茶の湯を教授している、そうしたアメリカで茶の湯教授をしている人びとが40人、サンタフェに集まり、今アメリカでのお茶を教えるということはどういう問題点を持つのかということ、3日間会議したということの報告である。その中で大きな問題となったのは、日本でやっている通りにアメリカで教えるのか、それともアメリカ文化適応型、つまり、日本で学んだけれど、自分たちはアメリカ人なのだから、現地の文化に適応させていくのが自然の姿であって、日本にはない茶道の形を求めていくのか、という議論であった。後者のような考え方の人がその会議出席者の中にいたということが報告されている。つまり、アメリカではアメリカ風の茶の湯の型というものが作られてよいのではないかという声があがっていた。そして、稽古はいかにあるべきかという議論の中で、アメリカの先生は点前の稽古を一通りさせるけれども、いつまでも点前の稽古を続けることはしない。一通り手前ができれば、すぐ茶会を開くように勧める。茶会を開くことは体験する機会となり、稽古にも励みがでるし、お茶を知らない人に説明しなければいけないので、何を伝えるかということをも自分で考えることになる。だから、お茶をやるには茶会を開いた方がよい、という。アメリカにはホームパーティーの伝統があって、パーティーを開くことが気軽にできるので、むしろ日本のような難しいことを考えないでお茶会を勧めることができるのであろう。これはむしろ茶の湯本来の姿ではないかと思える。意外とアメリカのお茶は原点にかえっているのではないか。

会議ではそれ以外にも、興味深い意見が続出しているが、こうした茶の湯をめぐるひろがり、戦後50年に及ぶ茶の湯普及のなかから生まれてきたのである。戦前の点と点の交流をこえて、日本の茶道界という面のひろがり、海外の茶の湯愛好家の面のひろがり、交流していることが、はっきり見えてくる。こうした交流の質的変化のなかで、次の課題が問われているといえよう。